

論文の要旨

論文題目 コーパスを利用した日本語談話標識「でも」「だから」の使用に
関する研究
氏名 陳 相州
学位 博士（文学）
授与年月日 平成 23 年 3 月 25 日

本論文は、日本語談話標識「でも」「だから」の記述的研究である。「でも」は相手の発話内容を否定するという性質をもち、「だから」はわかりきった事柄だと捉えている姿勢を示すことになるため、会話において不用意に使用すると「非友好的」や「攻撃的」などのような印象を与え、場合によっては人間関係を損なう可能性がある。従ってこれらは、ほかの接続詞よりも解明の緊急性が高いと考えられるため、本論文では会話で使用する日本語の「でも」「だから」を研究対象とした。本論文では会話に頻繁に使われる日本語の「でも」「だから」を談話レベルで再考すると同時に、日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者（以下、中国語母語学習者）が実会話で使用する日本語の「でも」「だから」の差異を考察することにする。なお、本論文では会話で使用する「でも」「だから」のような接続詞を「談話標識」と呼び、情報の結束性以外に、会話管理や命題に関係する主体の態度を示す言語コードであると定義する。

本論文の目的は次の 2 点に集約できる。第 1 は、従来ほとんど研究されてこなかった日本語談話標識「でも」「だから」の音声面について分析し、日本語談話標識「でも」「だから」の音声的実現と談話機能の対応関係を考察することである。また第 2 は、中国語母語学習者が会話で日本語談話標識「でも」「だから」を如何に使用しているか、およびその使用には日本語母語話者の場合と如何なる相違が見られるのかについて考察することである。

本論文は、序論、先行研究、本論、結論から構成されている。

第 1 章 序論

第 2 章 先行研究

第 3 章 日本語談話標識「でも」に関する考察

第 4 章 日本語談話標識「だから」に関する考察

第 5 章 中国語母語学習者の会話における「でも」「だから」の使用位置及び共起表現に関する考察

第 6 章 中国語母語学習者の会話における「でも」「だから」の音声的実現に関する考察

第 7 章 結論

以下、各章の内容について簡単に述べる。

序論に続く第2章では、まず、談話標識という概念を説明し、本論文での定義を示した。次いで、本論文に関連する先行研究を「日本語の『でも』に関する先行研究」、「日本語の『だから』に関する先行研究」と「日本語学習者の接続表現の使用に関する先行研究」の3つに分け、それぞれの先行研究を概観した。その上で最後に、「本論文での新たな取り組み」について説明した。

第3章は日本語談話標識「でも」の韻律的特徴と談話機能を研究対象にしたものである。本章では、まず、日本語談話標識「でも」を考察するにあたって使用した分析資料である『日本語話し言葉コーパス』について説明した。次いで、日本語談話標識「でも」が繋ぐ先行発話と後続発話の間にAと否Aの関係があるか否かに重点を置き、「でも」の4つの用法を【Aと否Aの関係あり】の場合と【Aと否Aの関係なし】の場合に分類した。更に、それぞれの場合に現れる日本語談話標識「でも」の韻律的特徴を考察した。その結果は次のとおりである。「でも」の持続時間長については、【Aと否Aの関係あり】の場合に使用した「でも」は【Aと否Aの関係なし】の場合より、全体の長さが73msほど長く、2拍の中で特に2拍目が64msも長かったことが観察された。一方、「でも」のピッチ変動については、【Aと否Aの関係あり】の場合に使用した「でも」の2拍目の最低値が【Aと否Aの関係なし】の場合より1.78st程度低くなり、「でも」のピッチ下降幅が3.66stも大きかったことが見られた。本章の最後に、日本語談話標識「でも」について行った音響分析の結果に基づき、日本語談話標識「でも」の談話機能を対立予告と話題移行という2つの機能に分類し、それぞれの談話機能を詳述した。

第4章は日本語談話標識「だから」の韻律的特徴と談話機能を研究対象にしたものである。本章では、まず、日本語談話標識「だから」を考察する際に分析資料として使用した『日本語話し言葉コーパス』について説明した。次いで、相互作用の観点から日本語談話標識「だから」の使用を【聞き手認識十分】の場合と【聞き手認識不十分】の場合に分け、それぞれの用例と各場合の韻律的特徴を分析して考察した。その結果は次のとおりである。「だから」の持続時間長については、【聞き手認識不十分】の場合に使用した「だから」は【聞き手認識十分】の場合より、全体の長さが134msほど長く、3拍の中で特に最終拍「ら」が99msも長かったことが計測された。一方、「だから」のピッチ変動については、【聞き手認識不十分】の場合に使用した「でも」の2拍目の最低値が【聞き手認識十分】の場合より3.82st程度低く発音され、「だから」のピッチ下降幅が3.74stも大きかったことが観察された。本章の最後に、日本語談話標識「だから」の使用の韻律的特徴に基づき、話し手が使用する日本語談話標識「だから」の談話機能を再考し、結論導出と理解要請という2つの機能を抽出してそれぞれの談話機能について説明を行った。

第5章は中級・上級レベルの中国語母語学習者が日本語談話標識「でも」「だから」を使用する際の生起位置と共起表現を、日本語母語話者の場合と比較しつつ考察したものであ

る。本章では、まず、分析資料、調査対象者と分析方法を示した。次いで、使用位置と共起表現の種類について説明した。最後に、コレスポネンス分析の手法を用い、中級・上級レベルの中国語母語学習者が使用した日本語談話標識「でも」「だから」の使用位置と共起表現の特徴を分析して考察した。調査を通して明らかになったことは次のとおりである。中級・上級レベルの中国語母語学習者の日本語談話標識「でも」「だから」の使用割合は日本語母語話者の使用割合を遥かに超えている。また、日本語談話標識「でも」「だから」の使用位置については、中級・上級レベルの中国語母語学習者には日本語母語話者のように、発話中途部の使用が多く観察された。一方、日本語談話標識「でも」「だから」の共起表現については、中級学習者は発話冒頭部で何も加えずに日本語談話標識「でも」「だから」を使用し、発話中途部で1つの文を完結してから日本語談話標識「でも」「だから」を使用する特徴がある。上級学習者は発話冒頭部で直接に日本語談話標識「でも」「だから」を用い、発話中途部で言いよどみながら日本語談話標識「でも」「だから」を使用する特徴が見られた。全体的には、中国語母語学習者の日本語能力が上達するにつれ、徐々に日本語母語話者に近づいていく傾向があった。

第6章は中級・上級レベルの中国語母語学習者が実会話で日本語談話標識「でも」「だから」を使用する際の音声的実現に焦点を当て、日本語母語話者との相違を明らかにしたものである。本章では、まず、分析資料、分類と音響分析の仕方を説明した。それから、中級・上級レベルの中国語母語学習者が使用した日本語談話標識「でも」「だから」の持続時間長とピッチ変動という音声的特徴を明らかにした。調査結果を通して明らかになったことは、以下のとおりである。第1に、中級学習者と上級学習者は日本語の「でも」「だから」に共通の「高-低」パターンを学習している。第2に、使用場合が異なるにも関わらず、中級学習者と上級学習者が「でも」と「だから」を使用する際の持続時間長とピッチ変動には相違が見られず、同じパターンで発音する傾向があった。すなわち、中級学習者と上級学習者が使用した日本語談話標識「でも」「だから」の音声的実現には、日本語母語話者のように、「でも」「だから」の各拍の持続時間長とピッチ変動を用い、正しく場合を区別するという使用傾向が見られなかった。日本語母語話者と異なった使い方がなされているため、日本語母語話者が学習者の発話意図を理解する際の妨げになる可能性があると考えられる。

第7章では、本論文の主な研究結果をまとめ、日本語教育への応用及び今後の課題を示した。

本論文では日本語談話標識「でも」「だから」の使用を包括的に捉えるために、日本語母語話者が発話する際の韻律的特徴、談話機能、使用位置と共起表現について考察した。また、中国語母語学習者の日本語談話標識「でも」「だから」の使用実態を示すために、日本語母語話者の結果と比較しつつ、中級・上級レベルの中国語母語学習者の使用位置、共起表現と音声的実現を分析した。本論文の成果が中国語母語学習者を対象とする日本語会話

教育の改善に少しでも貢献できるならば幸いである。

今後、日本語母語話者と中国語母語学習者の標本数を増やしつつ、ほかの韻律要素、調査対象者の使用意識、日本語母語話者による聴取実験についてより多角的に分析し、日本語教育に一層貢献できるような研究を行っていきたい。